



Title	近畿地方における須恵器台付子持壺の位置づけ : 古墳出土資料を中心に
Author(s)	前田, 俊雄
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 541-551
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105069
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近畿地方における須恵器台付子持壺の位置づけ —古墳出土資料を中心に—

前 田 俊 雄

はじめに

古墳時代中期以降、日本列島で広く使用されるようになる須恵器は、次第にその器種を増加させていく。その背景には、横穴式石室の導入にともなう葬送儀礼の変化により、新たな器種の創出や器形の変化が生じることが指摘されている（藤原 1985 など）。また、墳形や墳丘規模など古墳にあらわれた階層性と須恵器の器種に階層的な相関を見出し、これに則した新たな器種が創出されるという意見（寺前 2005 など）も出されている。

このように古墳時代の須恵器は、当時の生活様式のみならず、古墳などの埋葬の実態やその階層性など、埋葬からみた社会の様相を復元する際の重要な一視座となることがわかる。なかでも集落遺跡からの出土が稀で、古墳などの埋葬の場からの出土が主となる器種については、古墳被葬者の性格を考えるうえでより有効な資料となろう。このような器種の一例として、台付子持壺があげられる。台付子持壺は須恵器の器種のなかでも事例も限られ、出土時期およびその分布に偏りが顕著であり、出土古墳の階層性が強く意識されてきた器種である。

須恵器台付子持壺の研究史は、山田邦和に詳しい（山田 1998）。須恵器台付子持壺の研究は、視点が多岐にわたる。主要なものでも、風俗史（間壁 1988 など）、渡来人論（斎藤 1969、近藤 1991 など）、分布論（柴垣 1984 など）、社会史的・政治史的研究など多数あげられる。なかでも首長墓で使用される器種であるという指摘（岸本 1975）は、以降の研究に大きな影響を与えている。

このように須恵器台付子持壺は、階層性の高い器種という位置づけがなされてきた。一方で階層性の具体相については、より詳細に示される必要がある。またその展開についても、形態的な変化の予察はなされたものの、その変遷の性格などは不明瞭であった。そこで本稿ではこれらの課題に留意しながら、近畿地方における須恵器台付子持壺の位置づけを検討する。

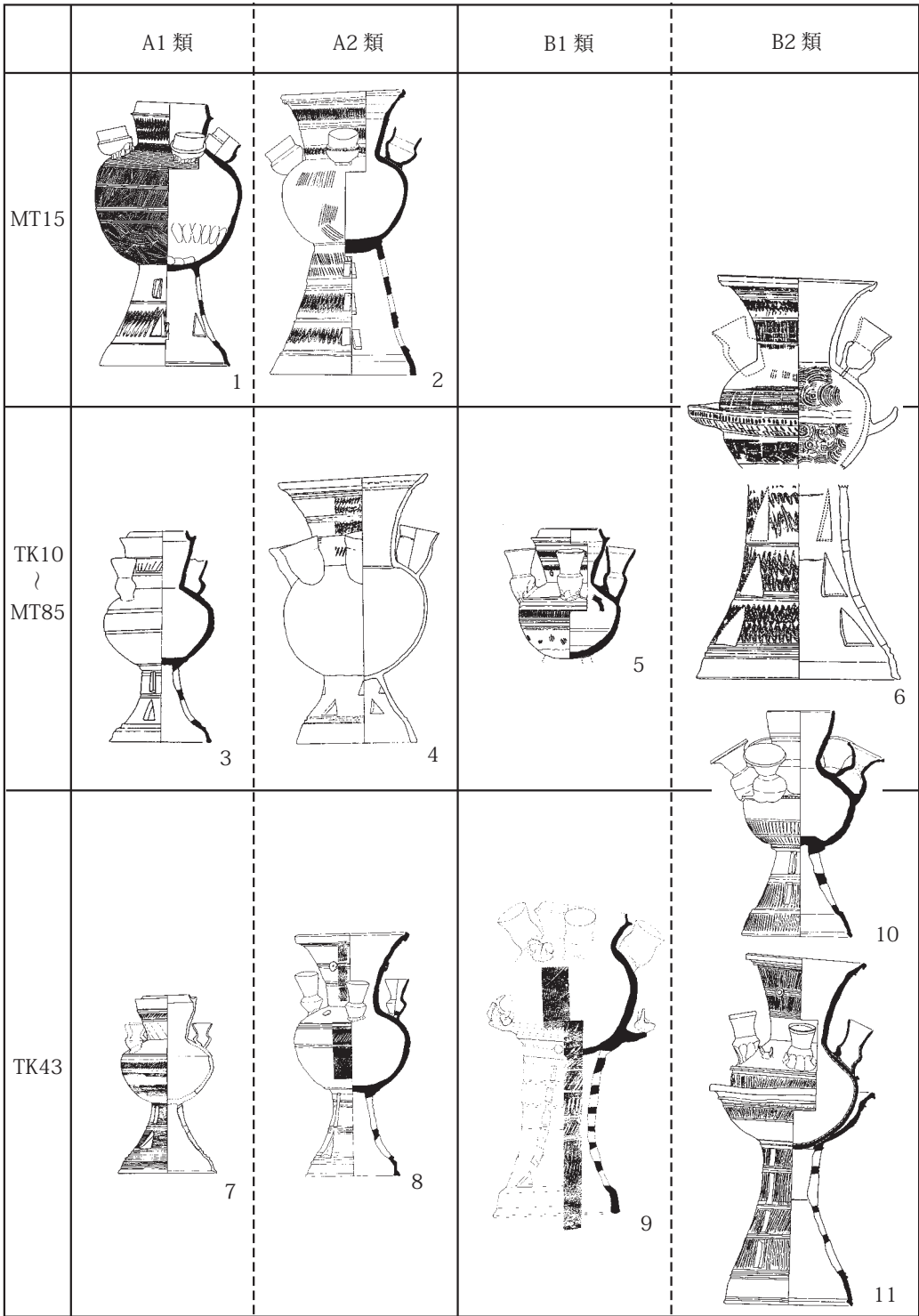


図1 須恵器台付子持壺の変遷①

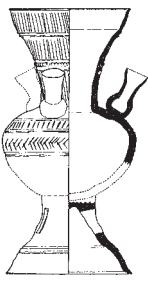
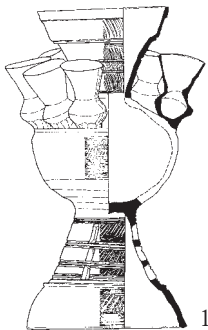
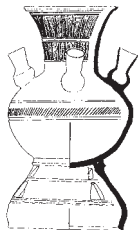
	A1 類	A2 類	B1 類	B2 類
TK209		 12		 13
飛鳥 I }		 14	1: 宮山 4 号墳 2: 坊主山 1 号墳 3: 南塚古墳 4: 井辺八幡山古墳 5: 長法寺七ツ塚 7 号墳 6: 見野長塚古墳 7: 龍王山 C3 号墳 8: 海北塚古墳 9: 中垣内古墳群中 10: 大枝山 22 号墳 11: 信太千塚 78 号墳 12: 南天塚古墳 13: 牧正一古墳 14: 入道塚古墳 (S=1/10)	

図 2 須恵器台付子持壺の変遷②

1. 須恵器台付子持壺の分類とその変遷

(1) 分類に関する研究史と分類視点

須恵器台付子持壺の分類について、今なお大きな影響をもつ見解を示したのは、岸本雅敏である。岸本は台付子持壺の成立過程を、子持壺が高坏形器台にのせられた姿を模して成立し、これが形骸化していくと予察した（岸本 1975）。また山田邦和は岸本の視点を引き継ぎ、器台の要素の有無に脚部の長短を加味した（山田 1989）。

このように須恵器台付子持壺の分類は、器台の要素が分類の重要な視点とされてきた。これは子持壺が高坏形器台にのせられた姿を模して成立したと考察されたため（岸本 1975）である。この考え方は性格や背景にも関連すると考えられる。本稿でも器台を模さない子持壺に脚台が付着するものを A 類、器台に子持壺をのせた姿を模したものを B 類とする。また子持壺の親器の形状⁽¹⁾ から、親器の口縁部に蓋の受け部をもつものを 1 類、親器が広口壺のものを 2 類とする。これらの要素を組み合わせにより、須恵器台付子持壺を A 1 類、A 2 類、B 1 類、B 2 類の 4 種類に分類する。

(2) 須恵器台付子持壺の変遷

近畿地方において須恵器台付子持壺が登場するのはMT15 型式期⁽²⁾である。MT15 型式期にはA 1 類とA 2 類の台付子持壺がみられ、B 類のものは確認できない。次のTK10 型式期になるとA 類に加え、B 類のものが1、2 類ともに確認できる。この状況はTK43 型式期でも続くが、TK209 型式期になるとA 2 類とB 2 類のものは引き続き確認できるが、A 1 類とB 1 類のものは姿を消す。そして飛鳥 I 以降になると、A 2 類の台付子持壺が使用される(図1・2)。

ここまで須恵器台付子持壺の変遷をみてきた。この流れをまとめると、近畿地方における出現期にあたるMT15 型式期には、A 類のみ存在し、B 類は確認できない。このことから台付子持壺は、器台を模さない子持壺に脚台が付着するものが、器台に子持壺をのせた姿を模したものより先行することがわかる。次のTK10 型式期になると、A 類に加え、B 類のものもあらわれ、この時期にすべての型式のものが出そろふ。この状況はTK43 型式期まで継続する。

この状況が変化するのが、TK209 型式期である。A 類、B 類ともに存在するが、いずれも親器が広口壺の2 類となり、親器の口縁部に受け部をもつ1 類は姿を消す。そして飛鳥 I 以降にはさらに台付子持壺の形態は限られるようになり、A 2 類のみとなる。このTK209 型式期以降の親器の形態変化は、須恵器全体の型式変化のなかでのとらえられる事象である。

2. 分布からみた須恵器台付子持壺

(1) 分布の時期的変化(図3)

先にも述べたように、近畿地方において須恵器台付子持壺が登場するのはMT15 型式期である。MT15 型式期には、近江、山城、大和で分布がみとめられる⁽³⁾。この時期の台付子持壺は、坊主山1 号墳は地域の首長墳と考えられるものの、そのほかは群集墳からの出土であり、台付子持壺の性格を考えるうえで重要である。

TK10 型式期になると前段階で分布する地域に加え、摂津三島地域や播磨地域、紀ノ川河口付近などでも分布が拡大する。なかでも摂津三島地域では、以後単独墳での継続的な使用が確認されている。また播磨地域も以降、連綿と須恵器台付子持壺が使用される地域である。この時期の台付子持壺は前段階のように群集墳中で使用されるものもあるが、地域の首長墳とも考えられる単独墳での採用事例が増加する。その一例として、南塚古墳(大阪府茨木市)や見野長塚古墳(兵庫県姫路市)、市尾墓山古墳(奈良県高取町)などがあげられる。続くMT85 型式期には現状では資料は限られるが、これらの分布は前段階と共通する。

TK43 型式期は近畿地方において、須恵器台付子持壺の分布が最も拡大し、その数も増加する時期である。この時期には前時期にみられた摂津三島地域や播磨地域などに加え、あらたに生駒山西麓などでも分布が広がる。また和泉丘陵周辺では出土例が急増する。この時期の台付

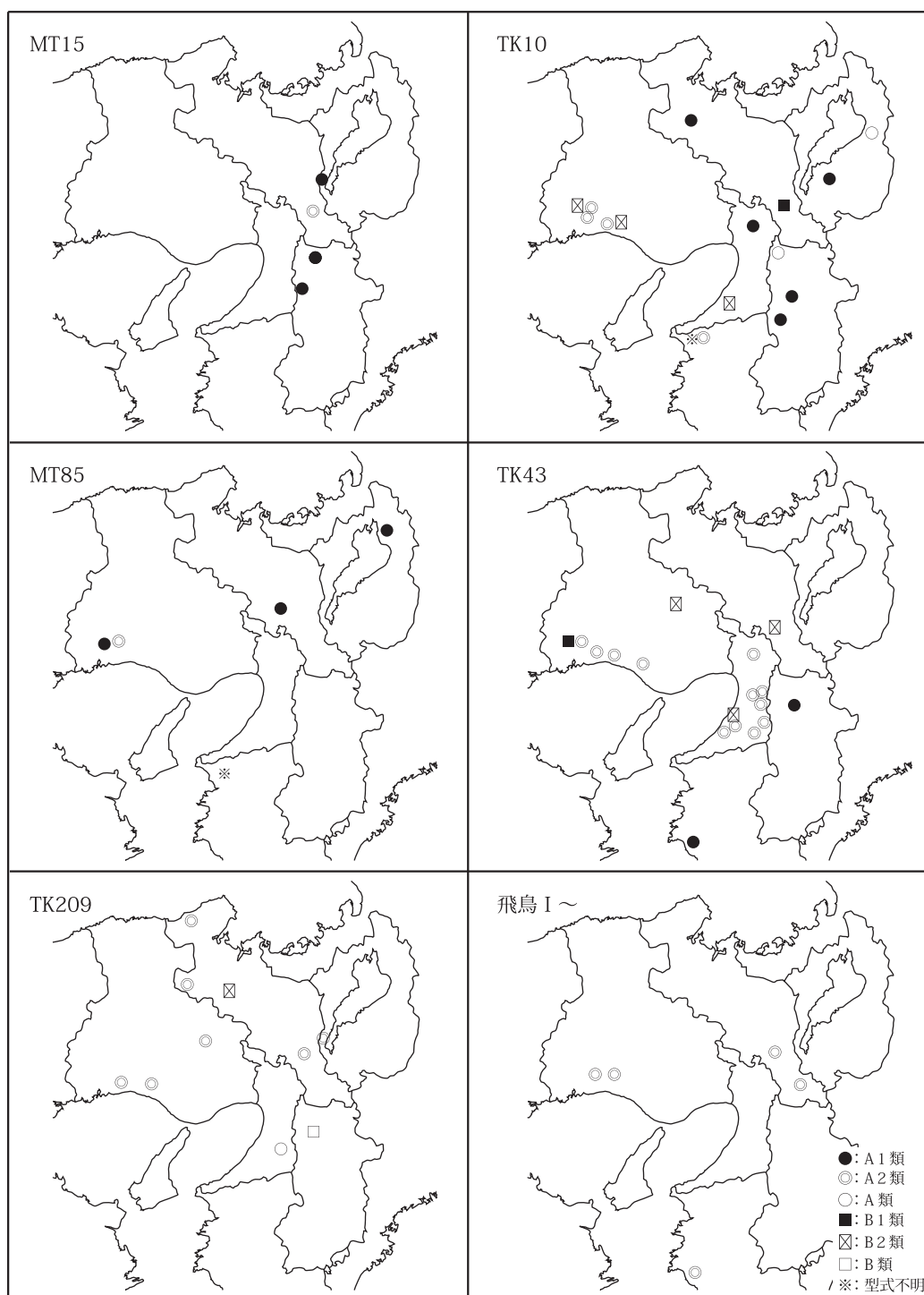


図3 近畿地方における須恵器台付子持壺の分布

子持壺使用古墳は単独墳と群集墳の両方がみとめられるが、この時期に分布が拡大した地域や出土例が急増する地域では、群集墳中からの出土事例が多い。

TK209 型式期は分布域および出土古墳の傾向は、前段階と共通する。そして飛鳥Ⅰ以降になると、須恵器台付子持壺の使用は近畿地方において下火となる。この時期には山城地域や播磨地域、そして紀伊などで分布がみとめられる。

（２）分布からみた須恵器台付子持壺の特質

ここまで近畿地方における、時期ごとの須恵器台付子持壺の分布の変遷をみてきた。ここからはその分布の変遷のもつ意味について検討をおこなう。

MT15 型式期は、近畿地方における須恵器台付子持壺の使用開始時期にあたる。この時期の出土古墳は群集墳が多く、導入期にあたっては必ずしも地域の首長墓である単独墳から使用が開始されるわけではないことがわかる。

状況が大きく変化するのは、TK10 型式期である。この時期には分布域が拡大するとともに、単独墳からの出土事例が増加する。この時期の注目すべき点に、今城塚古墳の存在があげられる。今城塚古墳は真の継体大王の陵墓とする見解が多いが、ここから須恵器子持壺が高坏形器台とともに出土している。ここであらためて台付子持壺が出土する単独墳をみると、すべての古墳が該当するわけではないが、継体大王との関係が想起される古墳が存在する。たとえば南塚古墳や見野長塚古墳、市尾墓山古墳などはいずれもこの時期に新たな首長墓系列の発端となる古墳である。また二上山白色凝灰岩製家形石棺（南塚古墳、市尾墓山古墳）の採用や金銅製二山式帯冠（南塚古墳、西宮山古墳）の副葬などの変化もあり、このような変革に継体大王との関係が想定されている（毛利光 1995、福永 2005 など）。継体大王との関係が想起される古墳すべてで台付子持壺が出土するわけではないが、一定の関係性を見出してもよいと考えられる。なお前段階の坊主山 1 号墳についても、被葬者像に継体大王を支えた人物が想定されている（豊島 2020）。このようなことから、近畿地方における台付子持壺の広がり、継体期における諸変革のなかで捉えることも大過ないのではなかろうか。この TK10 型式期が、台付子持壺の第一の画期といえる。

続く TK43 型式期はさらに分布域が拡大し、近畿地方における須恵器台付子持壺の最盛期にあたる。TK43 型式期は近畿地方において横穴式石室の導入が盛んになり、群集墳の造墓が活発になる時期でもある。なおこの時期に増加する台付子持壺は A 2 類のもので、前段階までとは様相が異なる。これは古墳の被葬者層が拡大する際に、あらたな型式の台付子持壺が群集墳の被葬者に用いられたと考えられる。この TK43 型式期が、台付子持壺の第二の画期といえる。

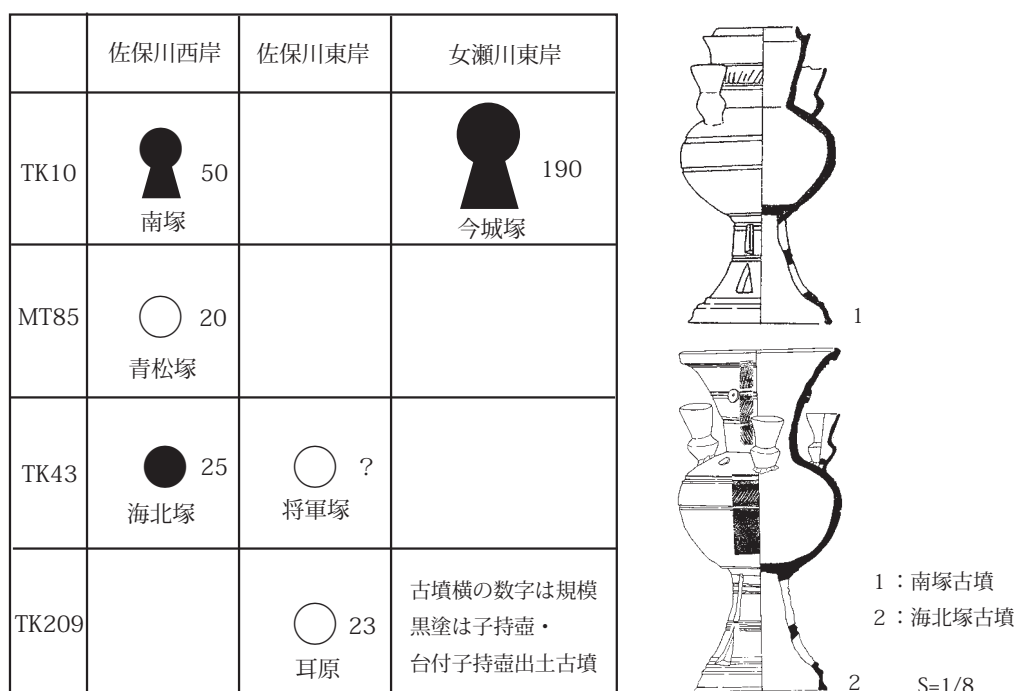


図4 三島地域における須恵器台付子持壺

3. 地域における様相

前章では、須恵器台付子持壺の分布とその変遷についてみてきた。台付子持壺の分布には、いくつかのまとまりが存在することがわかる。ここではこの点を踏まえ、地域における須恵器台付子持壺の使用のあり方とその意味について検討する。

(1) 三島地域の様相

TK10 型式期に、真の継体大王墓とされる今城塚古墳が築造される。また単独墳としては、佐保川西岸の南塚古墳⁽⁴⁾ もこの時期に該当しよう。この佐保川の西岸はこれ以降、継続的に単独墳が築造される。今城塚古墳では本来の使用位置は不明であるが、須恵器子持壺と高坏形器台が出土している。また南塚古墳では、石室内から須恵器台付子持壺が2個体出土している。

佐保川西岸では、MT85 型式期には青松塚古墳が築造されるが、台付子持壺は確認されていない。続く TK43 型式には海北塚古墳が築造され、ここでは台付子持壺が出土している。一方、佐保川東岸では TK43 型式期に將軍塚古墳が、TK209 型式期に耳原古墳が築造される。これらの古墳は内容が不明な部分が多いものの、須恵器台付子持壺の出土は知られていない（図4）。

このように三島地域では、佐保川西岸の単独墳で須恵器台付子持壺の継続的な採用が確認さ

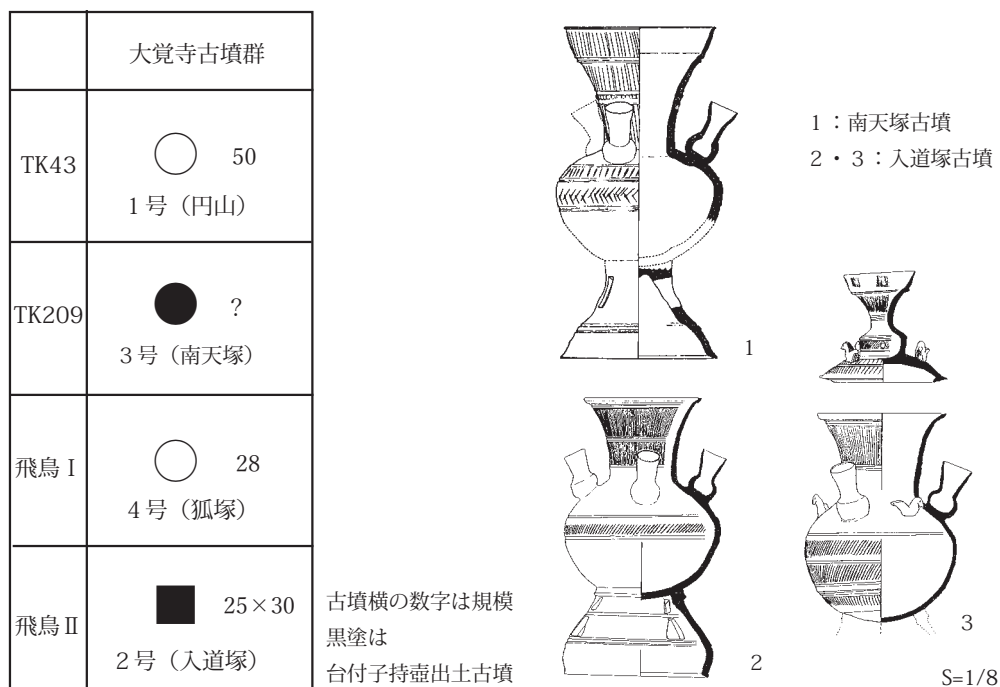


図5 大覚寺古墳群における須恵器台付子持壺

れる。近畿地方における早期の同様の例として、播磨地域の揖保川中・下流域などがある。

(2) 大覚寺古墳群における様相

嵯峨野地域では、規模の大小がある多数の群集墳が築造される。このうち大覚寺古墳群では、継続的な須恵器台付子持壺の使用がみとめられる。大覚寺古墳群は4基の古墳からなり、1号墳(円山古墳)、3号墳(南天塚古墳)、4号墳(狐塚古墳)、2号墳(入道塚古墳)の順の築造である。このうち南天塚古墳と入道塚古墳で、台付子持壺が出土している(図5)。

嵯峨野地域は秦氏との関係から、新たな集団が把握されて古墳を築造するというが指摘される(鎌田1971など)。より具体的な検討が必要であるが、この新たな被葬者の把握という観点では重要である。嵯峨野地域ではこのほかに、大枝山22号墳でも台付子持壺が出土している。

(3) 山畑古墳群における様相

次に、群集墳中における須恵器台付子持壺の様相をみていく。山畑古墳群は、中河内の生駒山西麓に築造された横穴式石室を主体部とする群集墳である。54基の古墳が確認され、円墳が主体であるが双円墳や上円下方墳が含まれる点が特徴である。

山畑古墳群では22号墳と33号墳で、須恵器台付子持壺が出土している。22号墳は残存長

15 m の双円墳で、33 号墳は円墳と想定される。22 号墳はE 支群に、33 号墳はB 支群に築造され、ともに TK43 型式期の築造になる。山畑古墳群では一部の支群でのみ台付子持壺が出土し、支群中においても 1 基のみでの使用である。なお 22 号墳は双円墳と特殊な墳形をもち、33 号墳も鉄地金銅張鐘形杏葉が出土するなど、支群中でも有力な古墳と考えられる。

（４）地域における須恵器台付子持壺

ここまで地域における須恵器台付子持壺の様相をみてきた。地域における首長墳とみなされる単独墳の事例では、地域内に複数の首長墓系列が見られる場合には、特定の首長墓系列のみで台付子持壺は採用される。またそのような首長墓系列であっても、必ずしも系列内すべての古墳で出土するわけではなく、系列内で点的に採用される傾向が強いようである。この様相は、地域の首長墳の累代の築造によって形成されたと考えられる古墳群でもみとめられる。

一方群集墳では、一群集墳内中では 1 基の古墳から出土することが一般的で、複数古墳からの出土は稀である。またそのような場合でも、出土古墳は支群を違えることが一般的である。須恵器台付子持壺が出土する古墳は、古墳群中あるいは支群中の有力古墳とみなされる。

このように須恵器台付子持壺は、これまでも指摘されてきたように、首長墳で使用されるなど階層性を示す器物（岸本 1975）であることがわかる。一方ですべての首長墳で採用されるのではなく、特定の首長墓系列でのみ確認される。この地域の首長墳への採用の契機に、いわゆる継体期の変革にともなう墓制の変化の一要素を、可能性のひとつとして考えたい。

一方群集墳における点的な出土状況については、これまでも複数種類の遺物が点的に副葬され、支群中で継続しない事例が指摘されている（絹島 2021 など）。このような事例のもつ意味については、群集墳の被葬者像や集団の把握など多角的な観点から検討が必要である。

４．近畿地方における須恵器台付子持壺の位置づけ

近畿地方において、須恵器台付子持壺の使用は MT15 型式期からであるが、TK10 型式期に大きな変化がおきる。当初は群集墳中出土が主体であったが、地域の首長墓と考えられる単独墳からの出土が中心となる。その背景には、継体期の変革になかで新たな有力者が台頭し、その有力者たちを表象する器物の一つとして台付子持壺が扱われたと考えたい。

その後、近畿地方で TK43 型式期に横穴式石室と群集墳の造営が広まると、再び群集墳中에서도須恵器台付子持壺が出土する。群集墳出土事例は原則的に群集墳内中あるいは支群中で 1 基の古墳から出土し、それは群集墳内の有力古墳である。なおこの時期に広まる台付子持壺は前段階のものとは型式が異なる。これは古墳被葬者層の拡大にともない、あらたな被葬者が把握されたことによって、これらの層を表象する器物として採用された考えたい。

このように近畿地方における須恵器台付子持壺は、従来指摘されていたように（岸本 1975）、その階層性の高さを追認した。またその分布や変遷など、その展開については、政治的動向が大きく関わっている可能性を指摘した。

須恵器台付子持壺の TK10 型式期の拡散については、継体期の変革をその要因として想定した。一方で、従来継体大王と関連が指摘された振り環頭大刀（高松 2007）などとは分布が一致しない。この差異の背景について、検討する必要がある。また実際の埋葬施設にともなう祭祀形態の面から、変化の実態を解明する必要もある。これらについては今後の課題としたい。

註

- (1) 須恵器の同一器種における蓋の有無は、高坏においては有蓋高坏の無蓋高坏に対する階層的優位性が説かれる（森本 2011 など）。これはこのまま壺にも当てはめることができるかは検討が必要であるが、留意する必要がある。なお 6 世紀半ば以降、有蓋の広口壺も登場するが、これは蓋内面にかえりをもつ。
- (2) 須恵器の年代はおもに田辺昭三（田辺 1981）、西弘海（西 1982）による。
- (3) 三重県松阪市所在の口南戸古墳では破片であるものの、台付子持壺に復元される須恵器が出土している。時期は 5 世紀末に位置づけられている。
- (4) 南塚古墳は横穴式石室の石積や組合式石棺の形式から古相とされ、MT15 型式期に位置づけられる。一方で出土須恵器は長脚化や長頸化の進行具合から、TK10 型式期に位置づけられる。本稿では須恵器台付子持壺を分析対象とするため須恵器の年代観を重視し、南塚古墳の時期を TK10 型式期に位置づける。

引用・参考文献

- 鎌田元一 1971 「嵯峨野の古墳群に関する覚書」『嵯峨野の古墳時代』京都大学考古学研究会、京都：pp. 159-168
- 岸本雅敏 1975 「装飾付須恵器と首長墓」『考古学研究』第 22 巻第 1 号 考古学研究会、岡山：pp. 34-59
- 絹畠 歩 2021 「副葬品からみた群集墳被葬者の職能と階層—畿内地域を中心として—」『群集墳研究の新視角』古代学研究会、大阪：pp. 115 ~ 237
- 近藤 広 1991 「古墳時代における渡来人の動向と中央政権との関連—近江出土の装飾付須恵器から—」『滋賀考古』第 6 号 滋賀考古学研究会、滋賀：pp. 64-69
- 斎藤 忠 1969 「わが国における帰化人文化の痕跡（下）」『日本歴史』第 252 号 吉川弘文館、東京：pp. 1-16
- 柴垣勇夫 1984 「装飾付須恵器の器種と分布について」『愛知県陶磁資料館研究紀要』3 愛知県陶磁資料館、愛知：pp. 2-17

- 高松雅文 2007「古墳時代後期の政治変動に関する考古学的研究」『研究集会 近畿の横穴式石室』
横穴式石室研究会、兵庫：pp. 383-398
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店、東京
- 寺前直人 2005「後期古墳における土器副葬の階層性」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪大学稲荷塚
古墳発掘調査団、大阪：pp. 447-458
- 豊島直博 2020「総括」『坊主山古墳群出土品報告書』奈良大学文学部文化財学科、奈良：pp. 59-61
- 西 弘海 1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』平凡社、東京：pp. 447-472
- 福永伸哉 2005「いわゆる継体期における威信財変化とその意義」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』大阪
大学稲荷塚古墳発掘調査団、大阪：pp. 515-524
- 藤原 学 1985「須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義」『末永先生米寿記念献呈論文集』
末永先生米寿記念会、大阪：pp. 545-59
- 間壁葎子 1988「装飾須恵器の小群像一制作の意図と背景一」『倉敷考古館研究集報』第20号 倉敷
考古館、岡山：pp. 33-84
- 森本 徹 2011「群集墳出土の土器」『館報』14 大阪府立近つ飛鳥博物館、大阪：pp. 15-34
- 山田邦和 1989「装飾付須恵器の分類と編年（上）」『古代文化』第41巻第8号 古代学協会、京都：
pp. 16-29
- 山田邦和 1998『須恵器生産の研究』学生社、東京
- 毛利光俊彦 1995「日本古代の冠—古墳出土冠の系譜—」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所、奈良：
pp. 65-129